

新 選
漢和辭典

新 版

新 選 漢 和 辞 典

新 版

小 林 信 明 編

小 学 館

編者

東京教育大学名誉教授
文学博士

小林信明

編集委員

大妻女子大学教授

大木春基

筑波大学教授
文学博士

牛島徳次

元東京都立駒場
高等学校校長

市木武雄

元東京都立西
高等学校校長

月洞讓

編者のことば

もしも人類が「ことば」を持たなかったならば、おそらくは正確な思考を進め、文化を高めることはできなかったであろう。それと同様に、もしも人類が文字を発明しなかったならば、文化を広く世間に伝え、遠く後世にまで残すことはできなかったであろう。文化と文字との関係は、あたかも「ことば」と文化との関係のようなものである。文字は「ことば」を表記する要具であるが、文字の持つ使命は、単に「ことば」の表記にあるだけではない。まことに、文字こそは、学問の府であり、文化の淵源である。

わが国の文字は、一に漢字に負うものである。漢字は、もちろん中国古来の文字であるが、今日では、日本の国字として消化されている。したがって、漢字についての知識の問題は、ひとりと中国文化の理解に関連しての要件であるばかりでなく、わが国文化の跡をたどり、さらには今後の日本文化の健全な展開のために、一刻もゆるがせにできないものである。

漢字の特色は、文字が直ちに「ことば」である点にある。漢字は直ちに「ことば」であるから、一字一字がそのまま文化を表象している。その結果、漢字は文化の進展とともに発達増加して、その総数は数万に上り、一字の画数は数十を数え、一字の訓義も数十に及ぶほどのものがあるに至った。このように、文化の展開は、漢字を限りなく複雑なものにしたが、しかし人

AA983/09 07

間の要求には、これと背反する一面があり、日ごとに複雑化する文化を整理し単純化して、これを実用に適したものにしようとする。その漢字における現象は、当用漢字の制定である。

当用漢字の制定は、今や中外にわたる事象である。このような歴史と現実との中にあつて、過去を知り、また将来を正しく導くために、われわれはどの程度の漢字の知識を必要とするであらうか。また、これに應ずるには、どのような辞書を必要とするであらうか。思うに辞書というものは、その向き向きに應じて最も適切なものでなくてはならない。ここに編者は、小学館の懇請により、高等学校の漢文学習を主として、一般社会の実用に應じ、中学校の要望にも答へ得る用意をもつて、本辞典を編集した。

本辞典の要領の一々に至つては、これを「まえがき」の項に譲るが、編集に当たつての最大の目標は、学習と実用とに最も適切で、そのうえ、だれにも最も引きやすい辞書とすることにある。この目標を達するためには、各職場の多くの人たちの意見をも、じゅうぶんに取り入れたつもりである。幸いにしてこの一書が、所期の目的を達することができるとしたら、編者の喜びはこれに越すものはない。

最後に、本書の編集は、もっぱら、大木春基君・月洞讓君・市木武雄君・牛島徳次君の力に負うものである。ここに明記して、謝意を表する次第である。

昭和三十八年正月吉日

編者しるす

新版のごあいさつ

十年一昔と申しますが、本書が初めて世に出てから、今年でちょうど満十年になります。この十年の歲月は、私どもにとつては、まことに大きな意義を持っています。それは、ただにこの書が長年月にわたつて皆様の変わらぬご愛顧を得たということだけではありません。この間に私どもは、修訂に次ぐ改版といったようなたゆまぬ加筆を重ねることによつて、本書に対する私どもの見識をいよいよ確かなものにし、皆様のご期待にこたえる道がどこにあるかを明らかにすることができました。その成果が、今やこの新版として実を結ぶに至つたのであります。

新版刊行の着手は、すでに数年前から始まっていました。親字や熟語に関する検討はもちろん、学習や日常生活面からの要請に対する吟味、また諸般にわたつての工夫は、ここに親字において二、八五〇字、熟語において三、三〇〇語を増し、親字総数一一、三五〇字、熟語総数六四、五〇〇語、判型もまた拡大の上、丁数一、四〇八ページに達しました。これは、優に世上の中辞典をしのぐに足るものであります。その内容の充実に至つては、解字の刷新、現代中国の簡化文字の収録、中国語音のカナ化、難読な地名・人名・姓などの明示などから、熟語の検索の便まで、まさに一新生面を開かんとしています。これらの諸方策は、一に編集員四氏の創案に待つものに外なりません。

本書のこのような増補と改革とは、すべて生徒や一般社会人の要望に応ずるために、必要にしてかつ十分な体制を具備するものとして準備されたものでありまして、私どもは、今後もこの目標に向かって不斷の努力を続けてまいりつゝでございます。なにとぞ皆様の従前にも増すごべんたつを賜りますよう、切にお願い申し上げます。

昭和四十八年四月吉日

編者しるす

この辞典を使う人のために

この辞典は

- (1) 中学校上級以上の国語学習用の参考として
 (2) 特に、高校の、漢文を中心とする古典学習用の伴侶^{はんりょ}として
 (3) 一般社会人の実務用の必携^{ひつべい}として
 (4) じゅうぶん役割の果たされることを目あてに編集したものである
 その立場から、主として次のような諸点に特に意を用いた。

● 親字および見出し熟語を、できるかぎり豊富に、かつ精選した

親字約一一、三五〇、見出し語約六四、五〇〇という数は、その量において優に一般中辞典級を凌駕^{りやう}し、高等学校用国語漢文教科書はもちろん、およそ学習資料としての漢籍（四書・唐宋^{しやう}・八家文・唐詩等）に関するかぎりは、そのほとんどを網羅^{もうら}しているのみならず、見出し語においては

● 国語古典語および日常生活漢語 ● 人名・地名・書名・王朝名その他学習関連事項 ● 現代中国の常用語等をも加えて、質量ともに漢和辞典本来の使命にこたえ得るよう念じた。

● 漢文学習の実際の利用という立場から、特別の配慮を施した

辞書利用の習慣を身につけることは、学習に興味を見出して、学力を高める絶対の道であると言われるが、その点漢和辞典は、漢字の特質上、その利用を妨げるとかくの障害をまねかれなかった。

この辞典では、特にここに思いをいたし、もっぱら利用者の立場に立つて、形式・内容両面への配慮とくふうを施した。たとえば仮に部首をまちがえて引いても直ちにその親字を見出し得るよう、本

来の親字以外に、檢索用親字を設置したのも一にその現れにほかならない。その他、次に掲げる諸配慮も、すべてその趣旨に沿ったものである。

- 各親字の詩韻、漢音・吳音・唐音・慣用音の別、字音表記の新旧別、新旧字体等の表示 ● 当用漢字等の原義の解説 ● 現行教科書中の有名な句の多数採用 ● 出典の明示 ● 利用度の高い付録「漢字について」・「漢字の筆順」・「新旧字体対照表」・「同訓異義要覧」・「行書・草書体一覽表」・「漢語の基本的な組み立て」・「漢文の基本的な組み立て」・「避諱」一覽表・「歴代官職一覽表」・「歴代度量衡変遷表」・「中国学芸年表」・「中国歴史地図・現代地図（索引付き）」・「中国・日本年号索引」・「二十八宿略図」・「十二月・二十四氣」等 ● 新旧かなづかいの対照的表示 ● 逆引熟語 ● 解説の簡潔明瞭

● 日常の言語生活の要請に応じ得るよう、特別のくふうをした

- 教育・当用・人名用・補正各漢字の指示 ● 当用漢字の音調許可の指示 ● 字体の新旧指示 ● 現代中国音および中国の常用語の指示 ● 中国新字体の指示
 したがって、本文解説の書き表し方も、原則として、新しい表記法に統一したことはない。

これを要するに、この辞典は、「形式においては小辞典、内容においては超中辞典を」の企画のもと、学習資料としても、社会生活一般の実用としても、漢和辞典本来の機能を十二分に達成するであろうことを念じつつ編集した。

なお、この辞典完成のためには、藤堂明保・頼惟勤・志村和久・鈴木三省・大坂茂雄・江連隆・高木重信・金子泰三・八丸吉昭・福地滋子・伊藤恒之・田場啓子の諸氏をはじめ、多数の方々の方力な御力添えを仰いだ、これもひとえに内容の完璧^{かんぺき}を期してのことである。

この辞典の使い方

■ 親字とその解説について

【親字の配列】は、「康熙字典」に従い、部首順・画数順による。ただし、同画数の中では、検索上の便宜から、原則として「教育漢字・当用漢字・人名用漢字・補正漢字・その他」の順にした。

■ 親字の解説

(例1)

【従】

イ

7

【(従)】

イ

8

ジ

ジュ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

ウ

①へしたが・う(一)ふしたが・える④言うことをきく。⑤あとについて行く。⑥つれて行く。⑦ならう。まねる。⑧又より……から。⑨又たて南北「縦」⑩とも。おつきのけらい。⑪親戚関係を表す。「兄」

【解】形声・会意。走と从を合わせた字。走は行くこと。从とは音を示すとともに、人が二人並ぶ形を表す。従は、ついて行くこと、あとを追う意味になるとともに、「たて」ということにもなる。

【例】「従」・「徒」は別字。

(例2)

【楽】

木

9

【(楽)】

木

11

日

ガ

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

ク

①薬。②ロー。③効。④おんがく。⑤姓。⑥たのしみ。⑦たのしむ。⑧たのしむ。⑨たのしむ。⑩たのしむ。⑪たのしむ。⑫たのしむ。⑬たのしむ。⑭たのしむ。⑮たのしむ。⑯たのしむ。⑰たのしむ。⑱たのしむ。⑲たのしむ。⑳たのしむ。㉑たのしむ。㉒たのしむ。㉓たのしむ。㉔たのしむ。㉕たのしむ。㉖たのしむ。㉗たのしむ。㉘たのしむ。㉙たのしむ。㉚たのしむ。㉛たのしむ。㉜たのしむ。㉝たのしむ。㉞たのしむ。㉟たのしむ。㊱たのしむ。㊲たのしむ。㊳たのしむ。㊴たのしむ。㊵たのしむ。㊶たのしむ。㊷たのしむ。㊸たのしむ。㊹たのしむ。㊺たのしむ。㊻たのしむ。㊼たのしむ。㊽たのしむ。㊾たのしむ。㊿たのしむ。

(1) 親字のすぐ下に、部首・画数、および【楽】教育漢字・【楽】当用漢字・【楽】人名用漢字・【楽】補正漢字の別を示し、新字体の場合はその旧字体もつけ加えた。

【従】の場合、イの部首七画で教育漢字であり、旧字体は従でイの部首八画であることを示す。

(2) 親字の字音は、かたかなで示し、当用漢字の音調として許容されるものはアンチック体(太字体)にした。なお、字音の歴史的かなづかいは、かっこに入れて参考にした。

【楽】の場合、字音はガク・ラク・ゴウ(ガウ)で、当用漢字の音調として許容されるものはガク・ラクで、ゴウの歴史的かなづかいは(ガウ)であることを示す。

(3) 漢音・呉音・唐音・慣用音の別は、それぞれ㊶㊷㊸㊹で、四声は㊶㊷㊸㊹で示し、韻字・現代中国音をもつけ加え、大体の発音をかたかなで示した。

【従】の字音シウの場合、その音は漢音、四声は平声㊶、韻字は冬、現代中国音は㊶で示す。

(4) 親字の解説は、訓と説明とより成る。訓はひらがなで示してへでかこみ、特に当用漢字の音調として許容されるものはアンチック体(太字体)にした。また、訓義が、わが国特有のものについては、㊶をつけて区別した。なお、訓が、活用語のときは、語幹と語尾との間に「・」を入れて区分した。(その訓の歴史的かなづかい、および文語はかっこに入れて参考にした。)

【楽】の場合、訓はたのし・い(たのし・む)へたのし・むへらくへ(この・む)、当用漢字の音調として許容されるものはアンチック体へたのし・い×たのし・むで、訓義が、わが国特有のものはへらくで、訓へたのし・い×たのし・むの「・」は、語幹と語尾との区分で、たのし・いの「し・い」は送りがなの部分で、(たのし)は文語であることを示す。

(5) 親字の字音によって意味のちがうものについては、㊶㊷……の番号によってそれぞれ字音と意味とを対応させた。また、親字の字音が同じでも、四声(韻字)のちがいによって意味のちがってくる場合は、説明のなかに「印」を入れて区別を示した。

【楽】の場合、字音日ガクの意味は、「日ガク……②姓。」まで、字音日ラクの意味は、「日ラク……(一六九)……下」の略」まで、字音日ゴウの意味は、「日ゴウ……ねがう」までであることを示す。

【從】の場合、シヨウの四声（韻字）㊦冬に対応する意味は、「㊦……㊦……から。」まで、ジュの四声（韻字）㊦冬に対応する意味は、「㊦……㊦……㊦……」まで、ジュウの四声（韻字）㊦冬……に対応する意味は、㊦以下であることを示す。

(6) 親字の説明は、原則として

④ 新旧両字体のあるものは、新字体の項で略字・俗字のある正字は、正字の項で行った。

(7) 解字……当用漢字、補正案で、当用漢字表に加える字、人名用漢字、部首として用いられる漢字については、主として「説文解字」(付録一二四)「漢字について」下段参照)により、象形・指示・会意・形声などの別とともに、日本の新しい説なども参照して、その原義を説明した。

(8) 人名……親字が人の名のりに用いられる場合のおもな読み方を掲げた。ただし、それがすでに親字の字音または訓として示されたものについては省略した。

(9) 國……特殊な読み方をする苗字(みょうじ)を列挙した。

(10) 地名……郡・市、その他むずかしい読み方をする地名を掲げた。

(11) 参考……主として親字の異体字、画数の異同、同音の漢字による書きかえ字、字形の類似文字を掲げ、その差違を明らかにした。

(12) 検索用親字……親字のうち、部首および画数のまぎらわしいものについては、特に検索の便を考慮して、その親字の本来の場所以外の数か所にこれを掲げた。これによって、たとえ部首をまちがって引いた場合でも、即座にその所在を見出すことが可能となる。

(例) 【功】²エ↓力部三画(一五三・上)

■ 熟語とその解説について

□ 熟語の配列

(1) 字数の多少にかかわらず、原則として第二字めの画数順に配列した。第二字めが同じ画数の熟語の多数ある場合は、まず二字だけの熟語を先にし、三字以上のものを後にした。ただし三字以上の

熟語でも、二字の熟語がもとになってできた複合語または句・文は、当該熟語のすぐあとに改行しないで、列挙した。この場合、当該熟語との重複部分は、「」で示した。

(例) 【道義】²ミチ・ギス……【心】²ココロ……

なお、同画内の熟語の順は、第二字めの字形を□・○・㊦の三種に分け、その順に配列した。

(これは、「中国字度類」の「小」↓□・「学」↓○・「子」↓㊦、「館」↓㊦と、字形の上から分類する法である。)

(2) 検索の便をはかるため、(一)を用いて、二字めの画数を示した。

(例) 【徳育】²トク・イク

(3) 句・文は、「」で示した。

(4) 独立した句・文は、長短にかかわらず、熟語の最後に列挙した。

㊦ 熟語の見出し

新字体または書きかえ字で行うことを原則とし、必要に応じて旧字体を(一)書きかえを(一)に入れて示した。

(例) 【冷気】²レイ・キ(仁知(智))

なお、見出し語の中に旧字体を掲げるのは、原則としては新旧字体の間に二画以上のちがいのある場合にかぎった。

㊦ 熟語の読み方

(1) 外来語以外はすべてひらがなで示し、その歴史的かなづかいは、参考として(一)に入れた。

(例) 【呈上】²テイ・ジョウ・(女真)テイ・セン

(2) 熟語が、読み方によって意味の異なる場合は、㊦㊦……をつけて区別した。

(例) 【利益】²リ・イクもうけ。㊦㊦神や仏のめぐみ。

(3) 現代に直接関係のある中国の主要な人名・地名などは、現代中国語の大体の発音をかたかなで示した。

(例) 【毛沢】²モウ・タク(毛澤東)・【北京】²ペイ・ギン

(4) 国語に特有の読み方・意味のものは、その特に明らかな場合に

この辞典に用いたおも

な記号・略語一覧表

反対語・対照語
 同意語
 ……を見よ
 * 逆引熟語
 新用語のあるページ指示
 四声(韻字)の違いによる意味の区別
 数字は、二字めの画数を示す句・文を示す
 教育漢字
 当用漢字
 人名用漢字
 補正漢字
 漢音
 呉音
 唐音
 慣用音
 平声
 上声
 去声
 入声
 国語に特有の読み・意味のもの
 現代中国語として特別の意味をもつ親字・熟語
 仏教用語
 哲学・倫理学・心理学・論理学用語
 法律用語
 経済用語
 数学用語
 物理学・化学・天文学用語
 動物学用語
 植物学用語
 医学・生理学用語

五

用例·出典

- (3) 見出し語中、主として句または文の出典については、必要に応じ、
 解釈の末尾にこれを付記した。
 (4) 同音の漢字による書きかえ熟語は、原則として当用漢字を用いた
 ほうで解釈した。
- 【例】**【綜合】** こうごう けいご 総合（八二一頁・上）

(例)

【総合】
こそう
(がふ) ↓ 総合 (八一・上)

四

熟語の解釈

かぎり、**㊦**で示した。また、現代中国語として特別な意味を表す熟語については、**㊦**をつけ、その発音をかたかな、およびローマ字で示したうえ、解説した。

(例)

【入車】☐ …… ☐ ひのくるま ④ 暮らしがひどく苦しいこと。
☐ フォーテ ユー hūche ⑤ 現汽車。

六

逆引熟語

親字を語末に用いた逆引きの常用熟語をかかげた。(親字「彩」のところでは)

目 表記について

解説はすべて簡潔平易を旨とし、かつその表記は原則として新しい表記法にしたがった。

ルビの振り方

(1) かな・字のときは()をつける。 (例) 楚(こ)・魏(き)

(2) かな二字のときは一行に書く。 (例) 漢(かん)・李斯(りし)

は一行に書く。

(例)

孟子もう・司馬遷せんば・趙ちよう・灸きゆう

て行くであらう。」へ詩経きよう・桃夭とうよう

①経書・子書については「書名・編名」を、
 (例) 〈論語・子罕^{かん}〉〈左伝・僖公^{きこう}〉

◎史書には「書名・目録の名」を

(例) 〔史記・高祖本紀こうそほんき〕 〔漢書かんしよ・項籍けうせき傳〕

〔例〕
〔文選^{もんせん}・古詩十九首〕
〔詩經^{しけい}・桃夭^{とうよう}〕

②その他は「作者名・題名」を示した。

(例) 〔屈原・漁父辞りき〕 〔杜甫とほの詩・兵車行〕

〔例〕
＊水彩さいし・光彩こうがい・多彩たさい・色彩しき・異彩いさい・淡彩たんさい

きたいん
・
精彩
さいせい

(例) 楚
• 魏

（例）漢方・李斯

三守以上でも換音

〔付〕本辞典に用いた中国現代音の表記法と他のおもな表記法との対照例はつぎのとおり。

(1) 「韻母」の例

○本書 ローマ字		カ ナ	○ウ エ ー ド 式	○注 音 符 号
a	ア		a	ㄚ
o	オー		o	ㄛ
e	イー		ê	ㄜ
ê	エイ		e	ㄝ
ai	アイ		ai	ㄞ
ei	エイ		ei	ㄟ
ao	アオ		ao	ㄠ
ou	オウ		ou	ㄡ
an	アン		an	ㄢ
en	エン		ên	ㄣ
ang	アン		ang	ㄤ
eng	オン		êng	ㄥ
er	アル		êr	ㄦ
yi	イー		i	ㄣ
ya	ヤー		ia	ㄣㄚ
yo	ヨー		yo	ㄣㄛ
ye	イエ		yeh	ㄣㄝ
yai	ヤイ		yai	ㄣㄞ
yao	ヤオ		yao	ㄣㄠ
you	ユー		yu	ㄣㄡ
yan	イエン		yen	ㄣㄢ
yin	イン		yin	ㄣㄣ
yang	ヤン		yang	ㄣㄤ
ying	イン		ying	ㄣㄥ
yong	ヨン		yung	ㄣㄥ
wu	ウー		wu	ㄨ
wa	ワー		wa	ㄨㄚ
wo	ウオ		wo	ㄨㄛ
wai	ワイ		wai	ㄨㄞ
wei	ウエイ		wei	ㄨㄝ
wan	ワン		wan	ㄨㄢ
wen	ウェン		wên	ㄨㄣ
wang	ワン		wang	ㄨㄤ
weng	ウオン		wêng	ㄨㄥ
yu	ユイー		yü	ㄩ
yue	ユエ		yüeh	ㄩㄝ
yuan	ユアン		yüan	ㄩㄢ
yun	ユン		yün	ㄩㄣ

(2) 「音節・声調」の例

○本書 ローマ字		カ ナ	○ウ エ ー ド 式	○注 音 符 号
bā	パー		pa ¹	ㄅㄚˊ
béi	ベイ		pei ²	ㄅㄟˊ
biǎn	ビエン		pian ³	ㄅㄧㄢˇ
hù	プー		pu ⁴	ㄅㄨˋ
pó	ポー		p'o	ㄅㄛˊ
mén	メン		mên	ㄇㄣˊ
meng	モン		mêng	ㄇㄥˊ
fan	ファン		fan	ㄈㄢ
da	ター		ta	ㄉㄚ
du	トゥー		tu	ㄉㄨ
te	トー		t'ê	ㄉㄜˊ
tuo	トゥオ		t'uo	ㄉㄛˊ
nun	ヌン		nun	ㄋㄨㄣ
lu	ルー		lu	ㄌㄨ
lù	リュイ		lù	ㄌㄨˋ
gu	クー		ku	ㄍㄨ
gui	コイ		kuei	ㄍㄨㄟ
kuang	コアン		k'uang	ㄍㄨㄤ
hong	ホン		hung	ㄍㄨㄥ
hu	フー		hu	ㄍㄨ
ji	チー		chi	ㄐㄣ
jian	チエン		chien	ㄐㄣㄣ
ju	チュイ		chü	ㄐㄨ
qin	チン		ch'in	ㄐㄣㄣ
que	チュエ		ch'üeh	ㄐㄨㄝ
xia	シア		hsia	ㄒㄧㄚ
xuan	シュアン		hsüan	ㄒㄩㄢ
zha	チャ		cha	ㄘㄚ
zhong	チョン		chung	ㄘㄨㄥ
chi	チー		ch'ih	ㄘㄣ
chu	チュー		ch'u	ㄘㄨ
she	ショ		shê	ㄕㄜ
shui	ショイ		shui	ㄕㄨㄟ
ri	リー		jih	ㄖㄣ
ren	レン		jên	ㄖㄣㄣ
zi	ツ		tzü	ㄗ
zao	ツァオ		tsao	ㄗㄠ
ca	ツァー		ts'a	ㄗㄚ
cuo	ツオ		ts'o	ㄗㄛ
si	ス		ssü	ㄘ
suan	ソアン		suan	ㄘㄢ

数字はページを示す
・印は中国新字体

[illegible]

米	竹	六	艸	白	皮	目	矛	矢	石	示	内	禾	穴	立	牙	四	禾	金	米
七九	七五	舟	艸	七二	七九	七三	七三	七四	七六	七六	七五	七五	七六	七三	六五	八四	九四	一七一	七九
色	艸	舟	艸	七二	七九	七三	七三	七四	七六	七六	七五	七五	七六	七三	六五	八四	九四	一七一	七九
八七	八二	八六	八三	八三	八七	八三	八五	八七	八七	八六	八四	八五	八六	八六	八六	八六	八六	八六	八六
足	走	赤	艸	虎	虫	血	衣	所	瓜	七	見	角	言	谷	豆	豕	豕	貝	艸
二二	二二	二二	二二	九三	九七	九三	九四	九四	六八	六八	九四	九三	九三	九三	九四	九五	九七	九八	八六
佳	束	阜	車	身	辛	辰	邑	酉	采	里	長	臣	舛	麥	八	金	長	門	阜
二六	二六	二二	二五	二四	二五	二六	二五	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二九	二七	二二	二二	二二	二二
骨	馬	香	青	雨	非	食	齊	面	革	章	非	音	頁	風	飛	食	首	香	馬
二七	二六	二六	二三	二三	二五	二五	二六	二六	二七	二四	二四	二四	二四	二五	二五	二五	二六	二六	二六
黃	黃	龜	高	高	門	鬯	鬯	鬼	章	龍	魚	鳥	鹵	鹿	麥	麻	黃	黑	龜
一四	一四	一三	二五	二五	二七	二七	二八	二八	二四	二二	二二	二八	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九
黃	黃	龜	黍	黍	黑	齒	齒	龍	鼎	鼓	鼠	鼻	齊	齒	齒	龍	龜	龜	龜
一四	一四	一三	二五	二五	二七	二七	二八	二八	二四	二二	二二	二八	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九
一四	一四	一三	二五	二五	二七	二七	二八	二八	二四	二二	二二	二八	二九	二九	二九	二九	二九	二九	二九

「介^{けい}」①ひとすじ。ひとりと。②つまらない。③ぐくわすか。④「へ」いひひ。ひとりの男。とるに足りない人間。⑤「一心」①ひとすじに心をかたむける。専心。専念。多くの人が心を一つにする。同心。③こころ。まごころ。⑥「不^ふ乱^{らん}」①ひとすじに。②こころをひとりだけでひきうけて売りさばく。③「毛」①ひとすじの毛。②きわめて軽いもの、またわすかなもの。③「不拔^{ふたつ}」たえそれて毛一本をぬくほどの犠牲であっても、他人のためになることと絶対にしない。極端な利己主義。また、極端なけちたこととえ。④孟子も、心^{しん}に^に拔^{はく}。利^り天下^{てんか}、不^ふ為^ゐに^に利^り天下^{てんか}。⑤「列子・楊朱」①「作^{さく}」②「毛^{もう}」③「一度^{いちど}だけ作る。④「毛^{もう}」⑤「匹^{ひつ}」⑥「一匹^{いつひつ}」⑦「反^{はん}」⑧「布^ふ」⑨「田^{でん}」⑩「田^{でん}」⑪「田^{でん}」⑫「田^{でん}」⑬「田^{でん}」⑭「田^{でん}」⑮「田^{でん}」⑯「田^{でん}」⑰「田^{でん}」⑱「田^{でん}」⑲「田^{でん}」⑳「田^{でん}」㉑「田^{でん}」㉒「田^{でん}」㉓「田^{でん}」㉔「田^{でん}」㉕「田^{でん}」㉖「田^{でん}」㉗「田^{でん}」㉘「田^{でん}」㉙「田^{でん}」㉚「田^{でん}」㉛「田^{でん}」㉜「田^{でん}」㉝「田^{でん}」㉞「田^{でん}」㉟「田^{でん}」㊱「田^{でん}」㊲「田^{でん}」㊳「田^{でん}」㊴「田^{でん}」㊵「田^{でん}」㊶「田^{でん}」㊷「田^{でん}」㊸「田^{でん}」㊹「田^{でん}」㊺「田^{でん}」㊻「田^{でん}」㊼「田^{でん}」㊽「田^{でん}」㊾「田^{でん}」㊿「田^{でん}」

【一】半^{ハナ}段二つに分けた一方。半分。
【二】匝^{ヒトマ}ひとまわり。一周。
【一生】曰^{いひ}ひとの當時。②一生。③三十年の間。④君主や家長の一代。⑤同名の國王の中の第一代。曰^{いふ}三世^{さんせい}過去。現在・未來の一つ。――一代^{いちだい}は百人の人生涯^{じんせいが}。一生代^{いっしゅうだい}。②生涯のなかでただ一度のこと。――之雄^{おに}^{おに}その時代で最もすぐれた英雄。
【一世紀】^{いっせいき}百年間をいう。
【一生】曰^{いひ}ひと。①生まれてから死ぬまで。一生涯^{じんせいが}。②生きていること。曰^{いひ}ひとりの書生^{しやうせい}。【懸命】^{けんぎん}假命^{かりめい}かけ。必死^{かならずし}「所懸命」^{ところけんぎん}西^{さい}六^{ろく}中^{ちゆう}の誤った語。
【一本恋】^{いつぽんこひ}新入^{しんにゅう}夫^{つま}が。
【一生恋】^{いっしゅんこひ}一冊^{いっさく}の書物。②別のある本。異本^{いほん}が。③草木などの細長いもの。④剣道などで相手に一回打ちこむこと。⑤もとを一つにすること。――槍^{やり}は木^き國^{くに}植^{うえ}のひと突きて敵をうちとること。②一つのことや考えをおしとおすこと。③その人のたゞ一つの得意なわざ。
【一目】曰^{いひ}一片^{いっぺん}目^め。②一つの項目。③藝妓^{げいき}の上の一つの石または目^めと稱^{なづ}ちよつと見る。一見する。【散】^{さん}とも、何^{なん}も目にはいらず夢中に走りゆくこと。いっさんに。――十行^{じゅうぎょう}いはらふ。ひとめで十行も目にはいる。すぐれた読書力。――瞭然^{りょうぜん}いはらふ。ひと目ではっきりわかるさま。
【一石】曰^{いひ}一つの石。②重さの単位。↓石七三六^{しちさんぱく}斤^{しん}。曰^{いひ}一ます目の単位。↓石七三六^{しちさんぱく}斤^{しん}。②材木の量は一つの単位。↓石(七三六^{しちさんぱく}斤^{しん})。②鳥といふものは一つの石で二羽の鳥を同時に打ち落とすとことから、一つのことをして一時に二つの利益を得る意。一挙兩得^{いつしよらうとく}。(下、中)
【一旦】^{いつたん}ある朝。ある日。ひとたび。↓一朝^{いちぢやく}(六)。「一代」^{いちだい}ひとの一生。②その世、または時代。【記】^きある人の一生の言行を書きしるした書物。
【初】^{はつ}長さの単位。初六三^{はつさん}上^{じやう}。②一尋^{いっじん}。↓尋^{じん}三〇^{さんじゆ}一^{いつ}寸^{すん}。中
【一札】^{いつしやく}一枚のふだ。②一枚の書き物。③証文^{しやうぶん}。証書^{しやうしょ}。一通^{いっとう}のてがみ。得^え足^{あそ}下前年病某時^{しもねんびやうぼうとき}

「通の手紙を受けとった。『白居易の『与微之書』に、
【去（邊）倒】云々。一方だけに心を寄せること。
【一に来い】は一つは行き一つは来る。行ったり来たり
計一菜一果、一杯のおゆめと一種類のおかず。
因は一つの原因。「粗末な食事。簡素な食事」
二両（兩）は二車一台の貨幣の単位。十兩（二
五匁・下）③二十匁。
一匡（圓）きまりのない状態を統一する。
一團（團）①一つの団体。②一つのかたまり。
一曲（曲）①音楽のひとつり。②まとまった音楽や舞
踊の曲の一つ。③水流などのまがりかど。④一部分。
之士（士）一面だけにかよった人。一曲の人。
一其（其）①全部で。②yongue いっしょに。
一同（同）①おなじこと。②全体。③いずれも。【目以】
一向（向）①ひたすら。いちずに。②またつ。まる
で。③宗（しゅう）浄土宗から分かれた真宗。開
祖は親鸞上人。門徒（もんて）好者（こうじゃ）それ
ばかりに心がとらわれること。

【一氣（氣）】①万物の根本の力。天地にあふれる生成
の力。②ひといき。ひとおもい。【阿成（あせい）】こ
つた筆に息を吹きかけあたためて、一氣に詩文を作り出
けること。③一氣に事を成しとげること。【混茫（こんぼう）】
一面に雲気がぼうとしていて、つかまえないさま。
一朵（ひとつ）①ひと枝。②ひとむらがり。【のいなさま】
一名（いちめい）十日間。旬は十日。
一旬（じゅん）①ひとり。②別の名。異称。
一字（いちじ）一戸。一軒。

【一字（いちじ）文字・親朋無（しんぺいなし）】（親しい友だちか
らは手紙一本も来ない。）〔杜甫（ふく）の詩・登岳陽樓（とうがくろう）〕
望（もち）活字版の古い呼び名。植字版とも称した。【不
說（せつ）堯（ぎょう）仏道のさとりとはことばでは説明でない意。一
千金（せんご）文字の価が千金にある。人の文字・文章
をはめる語。一字百金（ひやくご）褒貶（ほうてん）はへん字を使いわ
けて人をほめたなりした事。の之師（のし）の師。詩や

